

第一問

問一 ①母胎 ②確定 ③糧 ④破綻 ⑤兆候 ⑥祝祭 ⑦封建 ⑧輪郭 ⑨衰退 ⑩循環

問二 時間的存在としての自己が、さまざまな転変に見舞われ、個人を超えた諸関係の伝統の中に組み込まれながらも、人生における一貫性を手に入れる手段として自分の来歴・歴史を語ろうとする思考。（八十九字）

問三 出来事や状況と一体化した集団的時間を歴史の中に見つけ、構築して、時間を前後両方向に拡大して多様な時間の進展リズムの相互作用を見つめることで説明された過去の出来事。（八十一字）

問四 時間の中で継起するあらゆる出来事を、前後のほかの出来事と関連づけることなく、それが起きたその瞬間にすべてを検知して書き記すため、事実上人間には不可能で、歴史叙述ではない点。（八十六字）

問五 歴史叙述は、その出来事がどのようにあったかという不断に変化する出来事の継起を関係づけ、相互関係全体をまとめあげ、統一化されたストーリーに編み上げ、物語性を持つことによって、読者にも理解可能になるような道筋がもたらされてくるということ。（百十七字）

第二問

問一 ①おぼし出で（ダ行下二段動詞「おぼし出づ」未然形）・られ（自発の助動詞「らる」連用形）・て（接続助詞）

②聞か（カ行四段動詞「聞く」未然形）・れ（受身の助動詞「る」連用形）・たてまつり（ラ行四段動詞「たてまつる」連用形）・ぬる（完了の助動詞「ぬ」連体形）

問二 まめ人

問三 仏道修行が終わったのだろうか。

問四 仏道修行をしている姫君の、尼となったために普段は見ない色の衣を着た、尼削ぎの額髪がかかる目元のあたりのかわいらしい様子。
(六〇字)

問五 「影」は古いなじみの地で二人で見た月の光をたとえており、姫君のいなくなった今、涙で暗くなってしまう、同じように見えないことを表現している。

問六 男に出家した姿を見られても、人違いであるという弁明を予め用意していたのに、言い逃れできないほどはつきりと自分の尼姿を見られてしまったから。(六十九字)

第三問

問一 ①べからず ※「べからざれば」も可 ②あるひと ③あたらず ④まさに

問二 ここをもつてきみにあたふるのみ

問三 「書き下し文」またおほからずやと

〔現代語訳〕なんと多すぎるではないか

問四 どうして（蕭道成は）私懐珍が返礼として贈った百匹の絹に示される期待を裏切るだろうか。（いや、裏切るはずがない。）

問五 劉懐珍は、度量が大きいと評判の蕭道成に将来を託すために、騎乗に不適な馬とは不釣り合いな百匹の絹を惜しまず贈ったということ。

第四問

問一 可視化されたコミュニケーションは、行き違いをかなり減少させた半面、不安定な人間関係を生きる私たちが、つながりの状況や深度を判断する目安として機能することで、不満感や不安感を募らせてゆくようにもなった。（百字）

問二 前者では、つながっていない状況に対する不満や不安は、そう簡単には生じなかったが、後者では、つながりへの期待が拡大し、孤独に対して恐怖を抱き、孤独に耐える力が弱くなり、誰かとながらないう事態が生じると、その状況に対して強い不満や不安を抱くようになった。（百二十五字）

問三 投稿の評価・拡散の機能によって承認の度合いが可視化され、相手に抱く感情が重視される人間関係の中で、相手に受け入れてもらおうと、対立を回避し、なるべく悪い感情を抱かれないよう行動するようになること。（九十九字）

問四 承認が可視化された社会では、承認そのものが持続性に欠けるために、心理的緊張はそれだけでストレスになり、そのような不安定な関係におびえる人々によって、メッセージ性の強いものが中心を占めるようになること。（百字）